

主 題：主にある家庭生活④：主人と奴隷

聖書箇所：コロサイ人への手紙 3章22－23節

テーマ：神様から主人と奴隷に与えられた責任とは何か？

今朝、続けて見ていきたいのは、コロサイ人への手紙3章のみことばです。私たちはここ数回にわたって、主にある家庭生活、家族の関係について、特に3：18から順番に、パウロを通して神様が教えてくれていることを学んできました。最初に見た関係は、夫婦の関係でした。18－19節にその関係が記されていました。神様はそこで妻たちには夫に従うこと、夫たちには妻を愛することをはっきりと命じておられました。その次に見た関係は、親子の関係でした。続く20－21節で神様は子どもたちには自分の親に従うこと、親たちには子どもを怒らせないことを求めておられました。

こうして世界のすべてを創造された知恵ある神様は、私たちにとって最も身近で、最も親密な関係において、どのように歩んでいくべきなのか、大切な責任を明らかにしてくれていたのです。確かにどの責任も厳しいものでした。でも同時に、神様のみこころに従って歩んでいくということは、神様を喜ばせ、また私たち自身にも大きな喜びをもたらしてくれるものだったのです。さてこれから私たちは最後三つ目の関係を考えていきたいと思えます。ただその関係がいったい何なのかに触れる前に、まずは一度みことばをお読みします。3：22－4：1にその関係が描かれています。

コロサイ3：22－4：1

「:22 奴隷たちよ。すべてのことについて、地上の主人に従いなさい。人のごきげんとりのような、うわべだけの仕方ではなく、主を恐れかしこみつつ、真心から従いなさい。:23 何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心からしなさい。:24 あなたがたは、主から報いとして、御国を相続させていただくことを知っています。あなたがたは主キリストに仕えているのです。:25 不正を行う者は、自分が行った不正の報いを受けます。それには不公平な扱いはありません。4:1 主人たちよ。あなたがたは、自分たちの主も天におられることを知っているのですから、奴隷に対して正義と公平を示しなさい。」

三つ目に見る関係は、主人と奴隷の関係です。22節の冒頭「奴隷たちよ」ということばを読んで、自分には何の関係もないと考えて、それ以降のことばをさらっと読み流してしまう人もいるかもしれません。また、どうしてこれが主にある家庭生活の話につながるのだろうかと思った人もいるかもしれません。きょう初めに、皆さんに覚えていて欲しいのは、このことばが記されたパウロの時代、1世紀の家庭の形というのは、今よりもはるかに大きなものだったということです。今の私たちには想像し難いかもしれませんが、でもこの当時の一家族のうちには、夫や妻、両親や子どもだけでなく奴隷が含まれているのが当たり前でした。彼らは家の中で、主人に仕え、主人から託されたさまざまな仕事、働きを担っていました。またさらに言うと、奴隷は家庭の中だけでなく社会の中にも存在していました。今、私たちが周りを見渡してみても、奴隷の姿を普段見ることはありません。でも当時は人口の半分を占めるとも言われるほどの数多くの奴隷が文字どおり町中にあふれて、さまざまな仕事を行っていました。どんな仕事かと言うと、商業を担う者、教育を担っている者、農業や鉱山などで肉体作業を担う者もいました。彼らはそれがどんな働きであったとしても、主人から与えられた責任を果たして、ただ主人に仕えていたのです。そんな中で、自分の奴隷を大切に扱う主人もいれば、乱暴に扱う主人も存在していました。これがこの時代の社会のあり方、一般的な慣習、文化だったのです。主人と主人に仕える奴隷の関係は、まさに当時のあらゆる場面において見て取ることのできるものでした。もちろんパウロはそんな家庭や社会の状況のことをよくわかっていました。そして同時に、そのような主人や奴隷の身分に当たる者たちが、教会

の中にも集っていることを知っていたのです。だからこそパウロは彼らに向けてことばを書き送りました。奴隷の皆さん、主人の皆さん、あなたがたも神様の望まれていることをそれぞれ求めてくださいと。

これまで18節から妻、夫、子ども、父たちを見てきました。それぞれ1節だけが当てられていました。でも奴隷たちについては、22-25節と、4節にわたって書かれていました。教会の中には、たくさんの奴隷の身分である者がいたことを想像することができます。そしてそのような者たちに対しても、パウロはことばを送っていました。奴隷たちと主人たちに対して、神様が望まれていることを求めていくようにと。そしてこれは驚くべきことでもありました。当時の両者の関係を少しでも知っている人からすると、あり得ないと考えられるものでもありました。

この内容をより深く理解するために、当時の主人と奴隷を取り巻いていた環境がどんなものであったかを頭の片隅に入れておいてください。先週、親子関係を学ぶ時にも引用しましたが、ウィリアム・バークレー先生がその様子を次のように記してくれていました。「ローマ帝国には6,000万人の奴隷がいたと見積もられています。パウロの時代、ローマ市民はある種のひどい怠惰に陥っていました。ローマは世界の支配者であったため、働くことはローマ市民の尊厳に反するものだったのです。そして実際、ほとんどの仕事は奴隷が担っていました。医師や教師、皇帝の親しい友、手紙や嘆願書、財政を扱う秘書官でさえ奴隷でした。多くの場合、主人と奴隷との間には深い忠誠心と愛情の結びつきがありました。小プリニウスは、愛する自分の奴隷が何人か亡くなったことで非常に心を痛めていると友人に手紙を記しています。『私はいつも喜んで奴隷たちを解放してきました。また、私は彼らに一種の遺言書を作ることを許し、それをまるで法的に有効なもののように堅く守ってきたのです。』これはまさに優しい主人の言葉でした。しかし、基本的には奴隷の生活は厳しく、ひどいものでした。法律上、奴隷は人間ではなく、物と見なされていました。アリストテレスは、主人と奴隷の間には決して友情など存在しない、なぜなら彼らには何の共通点もなく、『道具がただの無機物の奴隷であるのと同じように、奴隷も生きた道具である』と述べています。また、ローマの学者ウァッロも農業に関する著作の中で、農業用具を三種の種類、話す能力があるもの、話す能力がないもの、口のきけないものに分けています。そして、話す能力があるものには奴隷が、話す能力がないものには家畜が、口のきけないものには運搬具が含まれていました。奴隷とはたまたま話すことのできる動物にすぎなかったのです。法律も非常に明確でした。ローマの法律家ガイウスも次のように述べています。『主人が奴隷の生死に関わる権限を持っていることは、普遍的に認められていることである。』もし奴隷が逃げ出せば、その罰は最も良くて額に逃亡者の烙印を押されること、最悪の場合には死刑が処せられました。別のローマの作家も述べています。『主人が奴隷にすることは、不当であろうと、怒りながらであろうと、喜びながらであろうと、嫌々ながらであろうと、うっかりであろうと、慎重に考えてであろうと、故意であろうとなかろうと、それが裁きであり、正義であり、法なのです。』パウロの奴隷に対する言葉はこんなひどい背景の中で読まれるべきなのです。」と。

どうでしょう？少し想像できましたか？先週の子どもたちの環境もひどいものでしたが、奴隷たちはさらに厳しいものでした。確かに、当時の社会において、奴隷は重宝されていました。彼らのことを大切に思っている主人も存在はしました。しかし、それでも多くはまるで道具のように扱われ、理不尽な主人によって苦しめられ、簡単にいのちを落とすこともあったのです。社会において、まさに奴隷は物のような存在でした。

でもすごいのは、そんな奴隷にも福音が届いたのです。彼らも同じように恵みによって救われ、キリストにあって新しくされました。コロサイの中でもパウロはこんなことを言っていました。3:11を見ると、「そこには、ギリシヤ人とユダヤ人、割礼の有無、未開人、スクテヤ人、奴隷と自由人というような区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。」と書いていました。このことばを聞いた奴隷たちはどんなに喜んでいただいでしょう。どんなに感謝していただいでしょう。確かに社会では、奴隷はまるで物のように扱われていました。でも神様は、そんな彼らに対してもあわれみを示されていたので

す。奴隷たちにも同じように、キリストと一つとされた者として歩いていくことができるという、そんな揺るがない希望を与えておられたのです。パウロは、そんな兄弟姉妹たちに向かって語るのです。キリストにあって、同じ兄弟姉妹の皆さん、ひどい扱いを受けることがあるかもしれません。それでも私たちを救ってくださった主が喜ばれるように、変わらず主人に仕えていきなさいと。

こうして当時、あらゆる場面で見て取ることでできた主人と奴隷との関係は、福音の力によって別の意味を持つものへと変わりました。仕える者にしても、仕えられる者にしても、その態度はいつもキリストに根差したものであることが求められるようになったのです。そして、これは今も変わっていません。少し前置きが長くなっていますが、ここまで聞いてきて、もしかしたらまだこの奴隷と主人との関係が自分とは何のかかわりもないと思っている人もいるかもしれません。確かに私たちは今、だれかの奴隷になるようなことは恐らくないでしょう。でも、当時の奴隷たちのように、だれかのためにいろいろな仕事や働きをすることはあると思います。特に仕事をしている人であれば、職場や会社でだれかの指示や命令を聞いて、その人のために仕えることがあるでしょう。またそれ以外にも例えば家庭にあったり教会であったり、私たちがそういったところでだれかのために仕えたり、まただれかによって仕えられたりする場面もありますよね？そして何より救われている者はみな、心から主に仕えていこうともするのです。

では、そんな時、私たちはみことばが教えているような神様が喜ばれる仕える態度というものを持っているのでしょうか？いやそもそも神様が喜ばれる仕える、また仕えられる姿というのはいったいどんな姿なのでしょう？そのことをわかっているのでしょうか？きょうは特にこの22-25節に記されている奴隷に与えられている責任に関して学んでいきたいと思えます。ここには、従うとはどういう態度なのか、そしてどうして従うのかという動機、二つを見て取ることができます。きょうは多分最初の態度だけしか見られないと思えますが、仕える者としての奴隷の姿をみことばから見ながら、ぜひ自分自身のこととして改めて考えてみてください。仕えていく者として、神様はどんなことを私たちに教えておられるのか、そのことをいま一度みことばと照らし合わせてみてください。

○主従関係における奴隷の責任：主人に従うこと 22-25節

1. 態度：従うとはどのような姿なのか？ 22-23節

では、従うとはどんな姿なのか、まずその態度から考えてみましょう。22節でパウロは奴隷たちに、「奴隷たちよ。すべてのことについて、地上の主人に従いなさい。」とはっきりと命じていました。余りにもシンプルな命令が記されていました。奴隷たちの責任は、主人に従うことでした。

▶「従いなさい」

ここで使われていた「従いなさい」ということばは、実は先週20節のところを見た子どもたちの責任、「両親に従いなさい」と全く同じものが使われていました。この「従う」ということばは、もともと二つのことば「下」を意味する“フボ”と、「聞く」を意味する“アクオ”がくっついてできたことばでした。そしてそこからだれかのことばや指示に従うとか、相手の言うことに従順になるといった意味で用いられました。ただ単にだれかのことばを聞くのではなくて、その相手の下に自分自身を置いて素直に聞き従うということが言われていたのです。また、パウロはこの22節でも、子どもの時と同じように、「すべてのことについて」ということばを用いていました。すべてのことについて主人に従いなさいと。もちろんこれも主人が神様に逆らって罪を犯すようにと言う場合は別です。でもそうでないのであれば、あらゆることにおいて奴隷は主人にいつも従っていくことが求められていたのです。たとえ自分の望まないことや好まないことであったとしても、たとえ自分の考えや思いと異なることであったとしても、一部分ではなくてすべての部分において、ある時だけでなくどんな時も、奴隷はみずから進んで自分の主人に仕えていくことが求められていたのです。それが奴隷たちに対して、仕えていく者たちに対して、神様が求めていることでした。

でもこれは実際にはどんな姿だったのでしょうか？どのように仕えていくことを奴隷たちに求めていたのでしょうか？見せかけだけのふるまいであろうとも、とりあえず従っていればよかったのでしょうか？もちろんそうではありませんでした。だからこそパウロはこの続きに具体的な態度を挙げています。従うというのがどのような態度なのか、特にここには否定的な態度が先に二つ、そして肯定的な態度が続けて三つ挙げられていました。それぞれ順に見てみましょう。

●否定的な二つの態度：

1) 人のごきげんとりのような態度

まず一つ目に挙げられていた否定的な態度は、「人のごきげんとりのような」態度でした。22節に「奴隷たちよ。すべてのことについて、地上の主人に従いなさい。」その後「人のごきげんとりのような」と続いています。この「人のごきげんとり」ということばは、もともと「人」と「喜ばせる」という二つのことばが結びついてできたものでした。そして容易に想像がつくと思いますけれども、このことばはそこから人を喜ばせるために、表面的な行動をする人物の姿を現していました。人からよく思われたい、人から認められたいと願うからこそ、内側には何も持っていなかったとしても、ただ外側だけを取り繕いながらふるまうのです。考えてみてください。当時の奴隷たちにとってこれは大きな誘惑だったと思います。最初にも言いましたが、主人たちは奴隷のいのちを思うがままにする権利を持っていました。好きなようにすることができたのです。そんな存在のきげんを損なったとすれば、それはそのまま死を意味することでもあったのです。またそうでなかったとしても、大きな痛みや苦しみが自分自身の身に降り注ぐことになるかもしれませんでした。それなら、ただ怒らせないように、彼らのきげんをとることに思いが取られて、心から喜んで仕えていくのではなくてしまう可能性が大いにあったのです。心に不満や憤りやいろいろなものを覚えていたとしても、その者を喜ばせるために、その者のきげんをとるために仮面をかぶって、その場だけはよいしもべの振りをしようと、そんな偽善的な態度に陥ってもおかしくはなかったのです。そして当時もそうですが、こんな態度というのは、今の私たちの周りの社会にもあふれていると思います。例えば上司や先生の前ではよく思われたいとふるまっている人が、隠れたところでは突然人が変わったかのように陰口やゴシップを口にしてしているようなことがあります。ほかの人から称賛されたいとか、ほかの人から受け入れられたり、ほかの人から好かれたりすることを願って、別の自分をふるまっているのです。人のごきげんとりのような仕え方、これはまさに表面だけの、内側を伴わないふるまいでしかありませんでした。だからこそパウロは、兄弟姉妹たちに対してそんな態度でもって仕えることがあってはいけませんと訴えていたのです。

2) うわべだけの態度

また次に挙げられていた二つ目の否定的な態度は、うわべだけの態度でした。22節「人のごきげんとりのような、うわべだけの仕え方ではなく」と続いています。この「うわべだけ」ということばも興味深いもので、もともとは「目」と「奉仕」の二つのことばがくっついてできたことばでした。文字どおり「目の奉仕」です。そしてここから主人の目が注がれている時だけは一生懸命に働くようなしもべの姿を表していました。だれかの目がある時は頑張っている姿を見せて、だれも見っていない時は怠けたり、サボったりするのです。当時の奴隷たちはこんな誘惑にもさらされていました。考えてみてください。厳しい主人たちがいるのです。厳しい主人たちと一緒にいる時だけは、必死に必死に必死に働いて、そしてその主人たちがいなくなってしまうと怠けてしまう。当時もそうでしたけれども、こんな態度は今の私たちの周りにもあふれていると思います。例えば親が見ている時には、真面目に課題に取り組んでいる子どもが、親がいなくなったその瞬間にはすべてを放り出して遊んでいたりすることがあります。皆さんの職場ではどうでしょう？上司の目があるその時には与えられたノルマを果たすことに必死な姿を見せていながらも、その場から上司がいなくなってしまうと、自分のやりたいことを思うままにしているような者もいるかもしれません。うわべだけの仕え方、それはまさに外側だけ、見せかけのパフォーマンスでしかあ

りませんでした。だからこそパウロはそんな態度でもって仕えることはあつてはならないですよと、兄弟姉妹たちに訴えていたのです。

少し自分自身のこととして考えてみてください。私たち自身はうわべだけ、ごきげんとりのような仕え方をしていないでしょうか？私たちがだれかのために働く時、私たちがだれかのために仕えようとする時、だれかの目がある時とそうでない時の働き方は、その態度は同じでしょうか？それともだれも見えていなければ、人が変わって自分の思いのままに、だれかを前にしている時には決してしないような態度やふるまいをしてはいないでしょうか？パウロは、そのような人のごきげんとりのような、うわべだけの仕え方はしてはいけませんと言うのです。

●肯定的な三つの態度：

パウロはこれに対比して、肯定的な態度も続けて挙げていました。このような仕え方をするのではなく、このような仕え方をしなさいと言うのです。

3) 主を恐れかしこむ態度

三つ目に挙げられていた態度は、主を恐れかしこむ態度でした。22節は続いていきます。「人のごきげんとりのような、うわべだけの仕え方ではなく、主を恐れかしこみつつ」と。人を恐れるのではありません。主を恐れることでした。そしてこれは従うということにおいて、仕えていくということにおいて決して欠かすことのできない重要な態度でした。というのも、私たちは今、人のごきげんとりのような態度というものを見ました。恐らく私たち自身のうちにもこの点においての弱さや難しさがあることを示されたと思います。では、どうして私たちはほかの人から受け入れられることを願ったり、人から好かれることに心を奪われたりするのでしょうか？なぜ私たちは人からの目に心が奪われることがあるのでしょうか？いったい何が原因なのでしょう？

その原因の一つは人への恐れでした。人を恐れる時に、私たちはそのような態度をとるのです。私はそんなことありませんと思う人も、ニック・バツィグという先生が、この点に関して説明をしてくれているので、そのことばを見てみてください。このように説明されていました。「人への恐れとは、単に人が私たちに与えるかもしれない危害を恐れることではありません。確かに、傷つくことへの恐れが、人から認められたいという私たちの欲求を駆り立てることもあります。しかし、バニヤンが言うように、人への恐れとは『人の好意、愛、善意、助け、そして友情を失うことへの恐れ』なのです。簡潔に言えば、それは『承認の偶像』です。私たちは『承認の偶像』、『快適さ』、『快樂』のために迫害を避けようとし、これらの偶像は、私たちが承認を得るために妥協し、受け入れと平安を得るために悪に屈するようにと私たちを導くのです。こうして、偶像崇拜の悪循環に陥るのです。」と。私たちが神様ではなくて、人を恐れているのであれば、言いかえれば、私たちが神様だけに信頼するのではなくて、人の好意や愛、助けなどを失いたくないと恐れるのであれば、そこには人からの承認を得たいという、そこには人からのそれが欲しいという偶像礼拝が生まれるのです。

みことばも箴言29：25に「人を恐れるとわなにかかる。しかし【主】に信頼する者は守られる。」と言っていました。鍵は、私たちが主を信頼しているかどうかでした。主にあつて満足を見出して、主にあつて十分な喜びや希望を見出して、主が自分をどのようにごらんになっているのかに心を留め続けるのか、それとも主以外の何者かにあつて満足を見出そうとし、主以外の者にあつて十分な喜びや希望を見出そうとし、そしてほかの人たちが自分をどのように見ているのかに心を留め続けているのかということなのです。そして後者であるのであれば、私たちはほかの人たちから自分が欲しているものを手にしたいという思いにかられ、そのものを自分から失いたくないと思って人を恐れるのです。主が与えてくださることに信頼するのではなく、ほかの人にそれを求め始めるその瞬間、私たちは人を恐れるようになるというのです。

だからこそ自分自身のこととして考えてみてください。私たちが仕事をしようとする時、だれかに仕えようとする時、いったいに何を恐れているでしょう？パウロは神様を恐れていました。だから彼はガラテヤ1：10で、「いま私は人に取り入ろうとしているのでしょうか。いや。神に、でしょう。あるいはまた、人の歓心を買おうと努めているのでしょうか。もし私がいまなお人の歓心を買おうとするようなら、私はキリストのしもべとは言えません。」と、はっきり口にしていました。キリストのしもべとして生きている私は、人の歓心ではなくて神の歓心を買うことに努めていると。彼自身はそうのように歩んでいました。だからこそ、パウロは同じように主を恐れてかしこみながら仕えていきなさいと兄弟姉妹たちに訴えていたのです。

4) 真心から従う態度

次に、四つ目に挙げられていた態度は、真心から従う態度でした。間違いなく言えるのは、神様は単なる外側だけの行いをいっさい求めてはおられないということです。そうではなくて、神様は心から生まれる従順な態度をいつも求めておられました。ここで特に用いられていた「真心」ということばは、「一つの思い」とか、「一つの考え」と言いかえることができます。そしてまさにそのことばのとおり、その人物の心がバラバラではなくて、一つになっている様子を表すのです。その姿を思い浮かべながら、先に見た否定的な態度と比較してみてください。人のごきげんとり、うわべだけの態度、このような状態になっている時、その人のうちにはいったい何が起きているでしょう？その人の心が分割されているのです。外側の行いは人々を喜ばせようとしていたとしても、内側の思いはそれとは別のところにありました。心が一つの状態にないのです。そしてそんな心から出てきたものは、悲しいことに偽善的で見せかけだけのふるまいでした。もちろんそれらは神様の前に喜ばれるものではありませんでした。だからパウロは兄弟姉妹たちに訴えていたのです。主を恐れかしこんで、バラバラの思いでするのではなくて、真心から従いなさい。一つの思いを持って、一つの心でもって従っていきなさいと。でもこれを聞いて、ある人は確かに一つの思いを持って、一つの心で歩んでいきたい、仕えていきたいけれども、どうすればいいのですかと思うかもしれません。もちろんそれは主を恐れることです。

5) すべて主のためにする態度

最後に、五つ目に挙げられていた態度は、すべて主のためにする態度でした。23節に「何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心からしなさい。」と記されています。言われていたことは明白でした。奴隷たちは、確かに地上にあって自分たちの主人に仕えていました。でもそれもすべてほかのだれでもない主のためにすることが求められていたのです。地上の主人だけではなく、それ以上に天におられる主人が喜ばれるように、心から仕えていくことが求められていたのです。

最初にも見ましたけれども、奴隷たちの置かれていた状況は簡単なものではありませんでした。確かに自分自身によくしてくれる主人に対して仕えていくことは容易かもしれません。でも、乱暴な主人たちは彼らのことを物のように、雑に扱うことがありました。主人たちの命令も理不尽で理解できないようなことも多々あったでしょう。奴隷たちは疲れている中であつても、主人にやれと言われれば、それをやるのが求められていました。ひどい扱いを受けた彼らがいらだちや憤りや悲しみを覚えて、仕えることに喜びを見出せないように思える場面は多々あったでしょう。感謝できないような場面も多々あったでしょう。そんな状況の中であつて、もしこの一つの事実を覚えていなかったら、心から主人のために仕えていくこと、一つの心でもって主人のために仕えていくのは、ある意味不可能だったでしょう。その事実とは、彼らがしていたすべての仕事や働きは、最終的には主のためのものだということです。彼らがなしていたことのすべては主のためのものでした。どんなに厳しい主人であつたとしても、どんなに自分自身が望まない働きや仕事であつたとしても、結局は、この主人を喜ばせるのではなく、天におられる自分の主人を喜ばせているのだと、彼らはそのことを覚え続ける必要があつたのです。

そしてその態度は、私たちが仕事をする時、何かに仕える時にも、私たちの考えを180度変えると思いませんか？私たちが何かをなそうとする時、もちろん私たちだってやりたくないこともあります。望んでいないこともあります。疲れている時もありますし、私たちの上に立っている者が理不尽で、不公平な時もあるかもしれません。喜びや感謝を失ってしまうような場面に出くわすこともあるかもしれません。でも、私たちがその仕事を覚える時に、私たちは結局のところ、この主人のためではなく、主のために、イエス・キリストのためにすべてをなしているのだと覚えるのであれば、私たちの心が変わられると思いませんか？コロサイの信仰者たちはそのように歩いていくことが求められていました。社会の中において、物のように扱われていた奴隷たちが、キリスト・イエスにあって救われたというこの事実、キリスト・イエスにあって一つとされたのだという、このすばらしい事実が彼らの心に喜びをもたらしただけではありません。その主を見上げて、すべてのことをなしていくことが欠かせなかったのです。彼らはそうやって、主に目を向けて歩み続けていくことが必要でした。

逆を言うと、仕えていくというこの姿勢は、あることを私たちに教えてくれています。私たちの仕える態度というのは、私たちが持っている主に対する愛を明らかにしてくれるということです。私たちがなしているすべての働きが、結局のところ、自分のためでも、その主人のためでもなく、神様のものである以上、私たちがどのように働いていくのかということは、私たちが主に対してどう思っているのかを明らかにしてくれるということです。だからこそ自分自身に一度問いかけてみてください。仕えていこうとする時、仕事をしようとする時、いろいろな場面において自分自身の持っているキリストに対する愛はどのようなものかということです。家庭においても、学校においても、仕事場においても同じです。私たちがなしているその働きは、結局のところ主のためになしていると。でももし私たちがそのように歩いていくのであれば、それは大きなあかしを立てることになります。この当時、奴隷たちは物のように扱われていました。そんな彼らが何を言われても、どんなに厳しいことがあったとしても、喜んで主人に仕えていこうとするのであれば、その生き方はキリストのあかしを、キリストの福音のあかしを大いに人々の前で明らかにすることにつながったのです。奴隷たちがどんな時も忠実に仕えていこうとする中において、主人たちは「いったいどうしてこの奴隷はこんなふうに進むことができるのだろう」と思うようになるのです。その時、奴隷たちはあかしすることができたのです。私たちは、もちろんあなたのために仕えていますけれども、それ以上に私たちは主に仕えているのです、主が喜ばれるために仕えているのです。それが奴隷たちにではなく、主に栄光を帰す生き方だったのです。

今の私たちも同じです。私たちもいろいろな働きや仕事が日々与えられています。私たちが覚えているべきことは、私たちがなすすべてのことは主のためだということです。今週一週間もいろいろな働きがあります。でもだれのためにそれをなしているのかということ覚えて、人のごきげんとりやうわべだけのよう仕え方ではなく、主を恐れかしこみつつ真心からすべてを主の栄光のために、続けてともになしていきましょう。